

舞台の恋人

難波利三



舞台の恋人

難波利三

舞台の恋人

定価一三五〇円

昭和六十二年八月十五日 初版印刷
昭和六十二年八月二十五日 初版発行

著 者 難波利三

発行者 嶋中鵬二

印刷所 図書印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二-18-17

振替 東京二二三四

©一九八七 検印廃止

ISBN-4-12-00166-4

舞台の恋人
目次

東京の空気	7
大阪の水	28
迷い虫	47
次の道	69
星の影	93
志願模様	116
旅の匂い	137
北の土産	154
夜は熱く	173

諦める風 197

曲がり初め 218

光る人 231

一と二 250

出発宣言 273

辛い朝 290

意外な報い 305

新しい景色 320

遠く近く 344

裝
幀
灘
本
唯
人

舞台の恋人

東京の空気

“アイスクリーム”が受けている。

白いワンピースに、赤い太めのベルトを締めたミッキが、手ぶりを加えながら早口でまくし立てると、同じ衣裳で少し小柄なムックも、負けずに言い返す。

なにを喋っているのか、内容はほとんど理解できない。だが、澁みのない早口の応酬に、客席は爆笑の連続で、拍手も起こる。その拍手はたちまち大きくふくらみ、場内をゆるがせた。女二人の喋りは、ますます冴えた。

「かなわんなあ」

杉田順が呟きを洩らした。

「ほんとだよ」

相づちを打ちながら、河島光夫は腕組みした。舞台の袖から、“アイスクリーム”に目をそそいだ。

こちら向きに立つミッキが、ついにムックを言い負かし、

「私、損だわ、無口だから」

と、小首をかしげたところで、客席は再び大爆笑に包まれた。

古い形の漫才だが、「アイスクリーム」は若い女性コンビらしく、元気よく演じた。口調は達者で、どちらも結構、美人タイプである。そこが受けるらしい。

深々と礼をして、「アイスクリーム」の二人は舞台の袖へ駆け戻った。次は光夫と順の出番である。

「よし」

順は両腕を肩の高さまで上げて、首を左右にひねった。興奮したときの、彼の癖だった。

光夫は膝に両手をかけ、素早く体を屈伸させた。それも一種の癖になっていた。

「さて、次は『横断歩道』の登場です。どうぞ」

司会者の声と同時に、二人は勢いよく飛び出した。百五十八センチの、小柄な順が前、百七十五センチの光夫が後に続いた。

だが、勢いが余り、順は舞台中央のマイクの前を歩き過ぎた。慌てて体を戻そうとしたとたん、足をすべらせ、あおむけに転んだ。客席には笑いが上がった。

「おい、大丈夫か」

光夫は順の手を掴んで引き起こした。

「すまん、すまん。つい、その、ハッスルしたもんやから」

「しっかりしてくれよ。初めて東京の舞台へ出してもらうんだからな」

「分かってるがな。そやから俺、新しい靴をはいてきたんや。それが失敗のもとや」

「いつものボロ靴でいいんだよ、ボロ靴で」

「もう遅い。手遅れや」

それは漫才のネタではなく、アドリブだった。順が転んだとき、光夫はわざと、そういう振舞

いに及んだのかと思った。前に出た「アイスクリーム」が馬鹿受けして客席を沸かせたから、對抗して、くさい芸を演じたのではないかと想像した。

だが、そうではなく、順は本当に転んだようである。表情を強張らせ、額にはあぶら汗をにじませた。

正面からはテレビカメラが狙う。

Wテレビのお笑い番組の公開放送で、東京・新宿にあるGホールから生中継の最中だった。

「横断歩道」も、大阪では何度か、テレビに出演したことがある。だが、東京では初めてだった。しかもGホールで、千人以上もの客を前にしての、生番組である。

その緊張感で、光夫も胃が痛いほどだったが、順のほうはそれ以上に固くなっている感じがする。

「アイスクリーム」に笑いを取られたのも、焦りを生んでいるらしい。転んだのは靴のせいではなく、それが高じて足の動きがぎこちなくなっただのかもしれない。

ネタに入ってから、いつもの調子が出ない。声が上がらず、トチリが多い。

へ落ちつけ、落ちつくんだ」

光夫は自分に言い聞かせながら、順にも目で訴えた。だが、効き目はなさそうだった。

「実は俺、作家志望やねん」

「それは無理だよ。身のほど知らずも、いいところだ」

「なんでやねん」

「身長百五十八センチ、体重五十キロのお前が、どうしてサッカーの選手になれるんだよ。サッカーボールにでもなりたいたいと言うのなら、まだ話は分かるけれど」

「無茶を言うなよ。俺をボールにして、蹴り殺そうというのか」

「蹴ったぐらいでは、死なないだろ、この手の顔は」

「おいおい。待てよ、違うがな。俺が言うてるのは、作家。お前が言うてるのは、サッカーやる。全然、違うがな」

「作家って、字を書く、あの作家のことかい」

「そや。小説家のことや」

「なおさら無理だよ」

「なんでや」

「お前、自分の名前を書くのがやつのくせに、小説なんか書けるわけがないだろう」

「馬鹿にするなよ。これでも字ぐらゐは書けるで」

「平仮名ばかりでは駄目だぞ。漢字も必要だぞ」

「分かていないな、お前は。いまはワープロがあるんやで。たとえ、この俺が漢字を知らんかつても、ワープロさえあったら、なんぼでも小説が書けるわけや」

「なるほど。ワープロか。これは、うっかりしていたよ。俺のサッカだ」

「それ、シャレのつもりか」

どうにか調子を取り戻して、二人は喋った。だが、客席の反応は鈍い。ときたま、小さな笑いが起こるだけで、「アイスクリーム」ほどの爆笑にはならなかった。

持ち時間は十分と決められている。短くても長くても、テレビの場合は段取りが狂う。あとでプロデューサーから、お目玉を食う。

客席の前にしゃがみ込んだフロアーディレクターが、「あと五分」と書いた札を示した。

「俺は作家志望」と題するそのネタは、二人で考え、十分びたりで収まるようになっていた。

順がベストセラーをものにすると言い、光夫が打ち消しながら、筋は連ぶ。豪邸に住み、銀座のバーで先生と呼ばれ、ふんぞり返るところまで、順はその気になって演じながら、ふと税金に気づき、頭をかかえ込む。

「何億も税金を払うのは、あほらしいな。お前、脱税の方法、考えてくれへんか」

「何億もの税金を払う作家なんて、ほんの数人だよ。お前がそんな流行作家に、なれるわけがないよ。いつも税務署から、返してもらっているんだろ」

「そうや。三月になると、それが楽しみで。こら、なにを言わせるんや。作家やで。流行作家やで。俺は何億もの税金を払う身分やぞ」

「言うのはただだからな。いくらでも言ってくれよ」

「そういう、人を馬鹿にした言い方をしていると、俺がほんまに流行作家になったとき、金、借りにきても、貸せへんからな」

「貸してくれなくてよいから、さっき、ここの食堂で食べたラーメン代、早く返してくれよな」
「すまん。ちょっと待ってんか」

それがオチになっており、丁度、十分の持ち時間を消化できるはずだった。

だが、前方のディレクターは、「あと二分」の札を差し出した。

喋りながら、光夫は見間違いではないかと確かめた。順も驚く表情を浮かべた。どこかで一つ、ネタを飛ばしたらしい。

しかし、もう前へ戻って喋るわけにはいかなかった。オチまで突っ走っていた。
「どうも有難うございました」

二人揃って客席へ頭を下げ、舞台の袖へ走り込んだ。待機していた「コントXYZ」のトリオの一人が、

「おっ、早えな」

と、眩きながら、光夫らと入れ替わりに飛び出して行った。

舞台の裏側をすり抜けて、二人は楽屋へ引き上げた。

「なんで二分も残ったんやろ」

途中、順がしきりに首をひねった。光夫も分からない。舞台の緊張と興奮に、しくじったという悔いも加わり、頭の中は混乱していた。足元が暗く、危うく突んのめりそうになった。

「あーあ、東京での折角のチャンスやというのに、二分も残したら、もうアウトや。あかん」
順は溜息まじりに言い、通路の壁を平手で叩いた。

「痛てて。ちくしょう」

喚きながら、手首を振った。「コントXYZ」は熱演しているらしい。場内の笑い声が届いた。今日出演の五組とも、楽屋は同じである。二人が入って行くと、仕切りのカーテンのかげから、「アイスクリーム」が顔をのぞかせた。

「お疲れさまでした」

「アイスクリーム」のミッキとムックが、声を合わせて言った。おしまいに全員が勢揃いするた
め、彼女らはまだ舞台衣裳のままだった。

「あかん」

吐き捨てるように眩きながら、順が二人のそばへ座り込んだ。楽屋は畳敷になっている。光夫もあぐらを組んだ。

「どうしてよ、面白かったのに」

ミッキこと北山美紀子が、横座りの格好で言った。楽屋の片隅にはテレビが据えてあり、「コントXYZ」が写っていた。

「二分も残ったんだ」

テレビの音声は小さく絞ってあるが、「コントXYZ」は熱演しているらしく、客の笑い声が聞こえる。横目でそれを窺いながら、光夫は言った。

「そうは思えなかったけど」

ムックこと早見睦美が、順と光夫を見比べた。

「ネターつ、飛ばしてしまつたんや。ちくしょう」

座ったまま、順は膝をかかえ込んで貧乏ゆすりを始めた。楽屋には二組——四人の他、誰もいなかった。

今日、Wテレビに出演する五組のうち、大阪からきたのは「アイスクリーム」と「横断歩道」だけで、あとの三組は東京である。「コントXYZ」の他にも、「日比谷公園集団」の六人、「ザ・金太、ザ・銀太」の二人が呼ばれている。いずれもまだ駆け出しだった。

「横断歩道」と「アイスクリーム」は、四人揃って何度か食事をしたことがある。年齢もキャリアも、ほぼ同じようなので、気が合った。もともと、二組とも漫才学校の出身で、その生徒時代から親しく口をきく間柄だった。

卒業後、美紀子と睦美は大手の芸能プロダクション——吉竹芸能へ入り、「アイスクリーム」を結成したが、光夫と順はどこへも所属せず、独自で活動している。プロダクションからの誘いが無いわけではなかったが、それよりも、自分達が気ままに、思いどおりに漫才を演じてみたい

という希望のほうが強かった。その分、なにかと障害が多く、やりにくいのは、覚悟の上だった。「あかんかって、もともとや。そのときはそのときで、また次のことを考えたらええんや。な、そやろ」

順のその言葉に光夫も同調し、「横断歩道」を作ったのである。名前は奇抜さを狙い、二人で考えた。単に奇抜だけではなく、車の流れを芸能の本流と見立て、それをさえぎって横切る、というところに、自分達の将来への夢を託したつもりだった。

テレビ画面には「日比谷公園集団」が登場し、ほどなく、「コントXYZ」の三人が楽屋へ戻ってきた。

「お疲れさま」

「いやあ、参っちゃったね」

「コントXYZ」のリーダーは、丸刈り頭の大男である。一時期、相撲に弟子入りしていた経歴の持ち主だった。

あと一人は瘦軀で長髪、もう一人は小柄で、いつもサングラスをかけていた。

汗を拭ってから、リーダーの大男は、煙草を咥えて「アイスクリーム」のそばへきた。光夫と、ミッキこと美紀子の間へ割り込む格好で、あぐらを組んだ。

他の二人も、ムックこと睦美と、順の近くへ座った。

「最高ね、あんた達の出来は」

丸刈り頭をつるりと撫で回し、煙草の煙を派手に吐き出しながら、リーダーは女言葉で話しかけた。舞台でも女性の真似をするのが、一つの売りものになっていた。

「俺の判定では、あんた達と俺達とが、鼻の差の勝負ってところだね。こちらさんには申しわけ